

■基本情報

氏名：小山 裕

所属：人文社会系研究科次世代人文学開発センター研究員

派遣形態：PD

研究課題名：ニクラス・ルーマンの社会理論の文献学的研究

■派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国・都市：ドイツ・ゲッティンゲン

研究機関：ゲッティンゲン大学

受入研究者：ヴォルフガング・クネーベル教授

(2) 派遣期間

平成24年7月9日～平成24年12月31日（総日数：176日）

■主な研究成果

(1) 概要

ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann, 1927-1998）の社会学がドイツの市民的自由主義という学統の批判的継承の試みと捉えうることは、博士論文「ニクラス・ルーマンにおける社会学的啓蒙と市民的自由主義」（2012年）ですでに示したところである。本研究ではルーマンの社会学を社会学史のみならず、広く第二次世界大戦後の知識人史、中でも保守主義思想史の中に位置づけることによって、このテーゼをさらに精緻化し、その批判的継承の方向性に見通しを与えることを目的とする。

(2) 成果

第一に、ルーマンの社会学理論の形成に対する「ライプチヒ学派」社会学の影響を測定した。今回の調査では「歴史認識」に着目することで、ハンス・フライヤー（Hans Freyer）における保守主義的 sociology の自由主義化がルーマンの理論形成における問題設定上の出発点として重要な役割を果たしたことが確認された。

フライヤーの社会学が歴史学に対しても一定の影響力を有していたことはよく知られる。この点を手がかりに、第二に、ラインハルト・コゼレック（Reinhart Koselleck）の歴史学とルーマンの社会学の比較を行った。その結果、両者は、問題設定と理論的関心という水準では、広く同時代的な共通性を有しているものの、それに対する理論的解答は、ほとんど正反対のものであったことが明らかとなった。コゼレックの概念史が複数性の保存という関心に貫かれているのに対し、ルーマンの進化論的社会理論は、いかに内部に含まれる緊張関係が強調されていたとしても、普遍史的ないし古典的近代化理論的な単一の歴史・

社会像の想定をもたらさざるをえない。

第三に、ルーマンの社会理論の批判的継承の方向性を見定めるための手がかりとして、ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー（Hans-Ulrich Wehler）以降の社会史の検討を行った。その結果、特にパウル・ノルテ（Paul Nolte）が『社会改革としての国家形成（Staatsbildung als Gesellschaftsreform）』（1990年）で示した二つの政治的近代化理論は、ルーマンの「政治理論としての社会理論」（Michael Hirsch）を歴史社会学へと接合するための足がかりとなりうるとの見通しを得た。

(3) 展望

社会学と歴史学の理論的統合の試みは、1970年代以降、さまざまに行われてきた。その二大潮流として、ヴェーラーの「社会史」といわゆる「第二波歴史社会学」（Julia P. Adam et al.）を挙げることができる。これらは問題設定の類似性にもかかわらず、これまでそれぞれにほとんど独立に議論を積み重ねてきた。ルーマンの社会学は、認識関心という点では、第二波歴史社会学よりもむしろ社会史に近く、事実、すでに少なからぬ歴史家によっていくつかの鍵概念が活用されている。今回の成果は、ルーマンの社会学を手がかりに、社会学の側から歴史的な社会理論を展開していくための足がかりとなるだろう。